

# 臨床看護学

## 1-1 構成員

平成29年3月31日現在

教授	2人
病院教授	0人
准教授	1人
病院准教授	0人
講師(うち病院籍)	0人 (0人)
病院講師	0人
助教(うち病院籍)	2人 (0人)
診療助教	0人
特任教員(特任教授、特任准教授、特任助教を含む)	0人
医員	0人
研修医	0人
特任研究員	0人
大学院学生(うち他講座から)	0人 (0人)
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員(教務職員を含む)	1人
その他(技術補佐員等)	0人
合 計	6人

## 1-2 教員の異動状況

佐藤 直美 (教授) (H9.8.1~H18.3.31助手; H18.4.1~講師; H23.10.1~准教授; H25.4.1~現職)  
 森 恵子 (教授) (H25.4.1~現職)  
 鈴木 みずえ (教授) (H20.8.1~現職)  
 武田 江里子 (教授) (H21.4.1~H25.9.30 講師; H25.10.1~H27.3.31 准教授; H27.4.1~現職)  
 安田 孝子 (教授) (H16.4.1~H26.3.31講師, H26.4.1~現職)  
 菅野 久美 (准教授) (H27.4.1~現職)  
 千々岩 友子 (准教授) (H25.4.1~現職)  
 宮城島 恭子 (講師) (H14.1.1~H17.3.31 助手; H17.4.1~現職)  
 河島 光代 (助教) (H21.11.1~現職)  
 杉山 琴美 (助教) (H16.4.1~19.3.31助手; H19.4.1~現職)  
 牧野 公美子 (助教) (H18.4.1~H19.3.31助手; H19.4.1~H29.3.31退職)  
 増田 郁美 (助教) (H27.7.1~H28.3.21; 教務補佐員、H28.4.1~現職)  
 坪見 利香 (助教) (H19.4.1~現職)  
 田坂 満恵 (助教) (H22.4.1~現職)  
 足立 智美 (助教) (H16.4.1~H29.3.31退職)  
 木村 幸恵 (特任助教) (H25.4.1~現職)

## 2 講座等が行っている研究・開発等

1	(1) 研究・開発等のテーマ名	慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度に関する研究
	(2) 研究・開発等の背景、目的、内容の概略	腰痛を含む痛みは主観的な体験であり、それをどうとらえ、解釈するか、どう向き合うかは個々により、また、人種や民族などによっても異なり、様々な要因に影響を受けている。痛みを体験している患者がそれをどのようにとらえ向き合っているかを明らかにする国際的に使用可能な尺度の作成が本研究の目的である。
	(3) 前年度までの状況	日本と米国で慢性腰痛患者にインタビューを実施し、そこから得られたデータを質的に分析した。
	(4) 当該年度内の進捗	内容分析の手法を参考に分析した結果、慢性腰痛患者の痛みに対する認識や態度として、【長く続く一生ものの痛みということは仕方がない】、【今よりも悪い状態にはなりたくない】、【自分なりに対処している】などのカテゴリーが導き出された。これらを第38回日本疼痛学会で発表した。また、質問紙の素案を作成中である。
	(5) 翌年度の方針と予想	質問紙を完成させ、日本と米国で質問紙調査を行う。
2	(1) 研究・開発等のテーマ名	集学的治療を受ける食道がん患者の「回復の実感」獲得を促進する看護実践モデルの構築に関する研究
	(2) 研究・開発等の背景、目的、内容の概略	集学的治療を受ける食道がん患者が、がんリハビリテーションプロセスにおいて「回復の実感」を獲得するプロセスを明らかにするとともに、「回復の実感」を獲得するプロセスを促進するための看護実践モデルを構築することが本研究の目的である。
	(3) 前年度までの状況	食道切除術後の回復過程において術後補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程は「生活圏の狭小化」及び「命と引き替えに生活圏の狭小化を受け入れ自分流の暮らし方を獲得する」をコアカテゴリーとする過程として説明できた。『時間の経過に伴う回復の実感』は、「命と引き替えに生活圏の狭小化を受け入れ自分流の暮らし方を獲得する」プロセスを促進させる一因となっていることが明らかとなった。
	(4) 当該年度内の進捗	集学的治療を受ける食道がん患者に「回復の実感」をもたらす要因についてインタビューを継続している。
	(5) 翌年度の方針と予想	対象患者へのインタビュー、分析を継続し、集学的治療を受ける食道がん患者が、がんリハビリテーションプロセスにおいて「回復の実感」を獲得するプロセスを明らかにするとともに、「回復の実感」を獲得するプロセスを促進するための看護実践モデルを構築する予定である。
3	(1) 研究・開発等のテーマ名	看護学生の手術台上での臥床体験が、手術室での患者の不安軽減に向けた患者ケアに及ぼす効果に関する研究
	(2) 研究・開発等の背景、目的、内容の概略	本研究の目的は、急性期看護実習において、手術室内で手術台上へ臥床を行なった看護学生の体験を明らかにし、患者の手術室入室から麻酔導入時までに必要な援助を明らかにすることである。
	(1) 研究・開発等のテーマ名	外来化学療法を受けるがん患者の心身緊張緩和を促進する看護実践指針の検証
	(2) 研究・開発等の背景、目的、内容の概略	本研究は、外来化学療法を受けるがん患者の心身緊張緩和を促進する目的で作成した看護実践指針を検証するための計画した。これまで、8名の対象者に看護実践指針を適用し、その成果を得られているが、今後一般化に向けて、指針を検証し、精錬することを目的としている。

4	(3)前年度までの状況	これまで、8名の対象者に看護実践指針を適用し、その成果を得られているが、今後一般化に向けて、指針を検証し、精錬することを目的としている。
	(4)当該年度内の進捗	平成28年度より、科研費・基盤研究Cの助成を受け、対象となるフィールドの開拓を行っている。また、看護実践指針に追加される具体的な項目を探索するために、国立がんセンターで開催された医療者のためのアピアランスケアの講習に参加した。ここで得られた知見に基づき、本学においてアピアランスケア講習会を開催し、対象者の反応より指針の内容の検討に繋がった。
	(5)翌年度の方針と予想	本学の倫理審査で承認を得て、臨床において看護実践指針を導入し、検証をはかる予定である。
5	(1)研究・開発等のテーマ名	進行性脳卒中患者の病の体験の構造
	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	本研究は、進行性脳卒中Branch atheromatous disease(BAD)患者の病の体験を明らかにすることである。BAD患者は、機能予後が不良な場合が多く、日常生活における苦悩は非常に大きい。障害と共に生き、自己実現性への支援に対し看護職は大きな課題を担っている。この研究の目的は、患者の語りから病の体験の特徴を導き出すこと、生活の再構築に対する支援への示唆を得ることである。BAD回復期過程における対象者に対し半構造化面接を行い、A.Giorgiの手法を参考とした質的分析を実施することで、病の体験が明らかとなった。
	(3)前年度までの状況	BAD回復期過程における5名の対象者に対し半構造化面接を行い、A.Giorgiの手法を参考とした質的分析を実施した。その結果12の意味テーマが見出され、患者の病の体験の特徴が明らかとなった。
6	(4)当該年度内の進捗	進行性脳卒中患者の病の体験の特徴が明らかとなったため、2016第36回日本看護科学学会学術集会にてポスターによる成果発表を実施した。
	(5)翌年度の方針と予想	成果報告を論文にまとめ学会誌への投稿により公表する。今後も引き続き、対象者への面接によるデータ収集、分析を併行し進めていく予定である。
	(1)研究・開発等のテーマ名	直腸がんサバイバーの手術後補助化学療法と就労継続を可能にする看護支援モデルの構築
7	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	手術後補助化学療法を継続する直腸がんサバイバーは、手術後の排便機能障害が残存する中で末梢神経障害などの有害事象を合わせ持ちながら、就労を継続することが大変困難な状況である。本研究の目的は、直腸がんサバイバーに対して手術後補助化学療法と就労継続を可能にするための看護支援モデルの構築を行うことである。
	(3)前年度までの状況	多胎妊娠を告げられた女性の看護実践モデルの構築
7	(4)当該年度内の進捗	文献検討と学会での情報収集をもとに、看護学研究者からのスーパーバイズを受け、作成した質問紙の内容の検討を行った。
	(5)翌年度の方針と予想	本調査の実施と調査結果の分析を行い、多胎妊娠が発覚した女性の困難への支援策をまとめていく予定である。

8	(1)研究・開発等のテーマ名	65歳以上の急性前骨髄球性白血病患者におけるQOL評価
	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	高齢APL患者のQOLと治療に伴う有害事象との関係を検証することで、患者がQOLを保ちながら治療を受けるために必要な看護方略を検討することを目的に国内多施設で追跡調査を実施している。
9	(1)研究・開発等のテーマ名	心大血管術後急性期リハビリテーションにおける離床遅延要因の検討
	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	心臓外科手術を受けた患者は、術後急性期において、ギャッジアップなどを含む初回離床が看護師によって行われることが多い。平成25年に行ったプレテストで、離床時のふらつき、術前日常生活自立度、術後合併症、術後認知機能障害、および術後Aib値低下などが離床遅延要因となることが明らかになった。心臓血管外科手術の低侵襲化がはかられ術後の早期離床が進んでいるにも関わらず、離床のための明確な基準はない。この研究の目的は、プレテストをもとに心大血管手術を受けた患者の急性期におけるより具体的な離床遅延要因を明らかにすることである。
10	(1)研究・開発等のテーマ名	認知症高齢者の転倒予防質評価指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発
	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	本研究の目的は、転倒予防ケア指標から抽出した内容を標準化した看護介入プログラムと看護師の介入のモチベーションを継続する実践継続システムを開発し、石川・浜松・東京の3地域の介護老人保健施設で1年間の多施設共同ランダム化比較試験(RCT)を実施、介入効果検証として①転倒予防に関する量的効果、②実践を強化する看護師の実践継続、③介入に関して看護プロセスを分析する国内外でも全く新しい看護介入を明確にした認知症高齢者の転倒予防の看護介入プログラムと実践継続システムの開発とRCTによる実証を展開させる。
11	(1)研究・開発等のテーマ名	長寿医療研究開発費 平成28年度 認知症「生活支障(トラブル)」の発症機序と対応に関する研究(28-10)
	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	認知症高齢者の生活支障は「認知症高齢者の生活の質を低下させたり、生活する上での困難や危険を及ぼすなど生活する上での支障のある状況」とし、ADLの障害やBPSDを基盤に日常生活動作、コミュニケーションや人間関係、活動など生活上における困難さやトラブルである。これらの生活支障は在宅復帰ばかりではなく、悪化すると介護老人保健施設の入所の継続を困難にさせる。本研究では、生活支障の実態を明らかにする生活支障尺度を開発する。生活支障尺度が明らかになっても、ケアスタッフは対処が困難であることが多いのが現状である。認知症のパーソン・センタード・ケア(寄り添い、信頼し合うという相互関係のもとで、その人の個性や人生に焦点をあてたケア)は、現在、世界共通の認知症ケアの理念としてシステムティックレビューでBPSDの有意な減少が実証されている。そこで、研究者らはパーソン・センタード・ケアを基盤に困難な状況を引き起こしている認知症高齢者の視点から原因やケアのポイントも含めた生活支障包括尺度の開発することである。本研究の目的は下記の2点である。 1. 介護老人保健施設における認知症高齢者の生活支障を具体的に明らかにするために、認知症高齢者の生活支障尺度(生活支障の状況を評価する尺度)を開発することである。 2. 認知症高齢者の生活の質を向上させるために、困難な状況を引き起こしている認知症高齢者の視点から原因やケアのポイントも含めた生活支障包括尺度の開発することである。
12	(1)研究・開発等のテーマ名	急性期認知症看護モデルを用いた戦略的ベンチマーキング開発とケアネットワークの構築
	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	わが国の超高齢化に伴い、急性期病院では認知症の行動・心理症状(BPSD)やせん妄のある高齢者が増加して看護師はさまざまな困難な状況に遭遇している。急性期病院の認知症高齢者の研修などが実施されるようになったが、ベストプラクティスのモデルやアウトカム評価がなされていない。急性期認知機能障害高齢者モデルをもとに急性期におけるベストプラクティスをめざした戦略的ベンチマーキングの開発と地域におけるケアネットワークシステムの構築を目的とする。

	(1)研究・開発等のテーマ名
	母親の養育者としての発達を促す支援—育児不安に対するSAT法による予防的介入—
13	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	育児支援として、これまでの外的要因(育児知識や技術の伝達、サポート体制の調整等)への支援とともに、今後はもっと母親の内的要因に働きかけられる支援が求められている。本研究は、育児不安に対する予防的介入および養育者としての発達を促す支援としてSAT法(Structured Association Technique、宗像:2007)を用いての具体的支援方法を構築することを目的としている。この支援は母親の内的要因への支援につながるものである、「健やか親子21(第2次)」に掲げられている母親の育てにくさに寄り添う支援となることが期待できる。
	(1)研究・開発等のテーマ名
	在日外国人への子育て支援事業のための基礎的研究
14	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	「外国人」であることは、特定妊婦や育児のリスク因子としてあげられていることは多く、文化や生活の違いによる妊娠・出産・育児が困難であることは周知のことである。文化や生活の違いによる困難さがあるのだから、子育て支援に対するニーズも日本人の感覚と異なってくると考えるのが妥当と言える。育児ストレス(不安等)を少なくする支援が、育児支援に対するニーズと考え、育児ストレスに影響する要因を外的と内的の両側面から調査することで、在日外国人母子への効果的な支援を検討していくことを目的としている。ハイリスクとならないような支援につながることを期待できる。
	(1)研究・開発等のテーマ名
	成人移行期の小児がん経験者の健康管理と生活調整の自立のプロセスを支える看護援助
15	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	本研究は、思春期後期から成人期初期にある小児がん経験者の自立のプロセスとその影響要因を、健康管理と社会生活の両立に焦点を当てて、小児がん経験者と親の視点から明らかにし、それを踏まえて小児がん経験者が自立して健康管理と社会生活を両立させていくことを支えるための看護実践モデルを構築することを目指すものである。
	(1)研究・開発等のテーマ名
	小児期の食育に関わる減塩教育プログラムの開発
16	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	塩分の過剰摂取に伴う生活習慣病が増えている現在、子ども時代の食習慣が成人期の健康に与える影響は大きい。健康寿命の延伸から日本人の塩分摂取量の目標値は減少しているが、塩分の過剰摂取の問題は少なくない。小児期における食育を推進するうえで、減塩教育は喫緊の課題である。しかしながら、小児期の減塩教育プログラムに関する研究は見当たらない。本研究は、小児期における減塩行動の実際を調査し、減塩教育プログラムの開発を目的とする。
	(3)前年度までの状況
	非該当
	(4)当該年度内の進捗
	学童期の「塩分摂取」に関する意識調査準備のため、関連学会(公衆衛生学会・小児保健学会等)への参加および、文献検討を行い塩分摂取に関する健康教育について情報収集を行った。
	(5)翌年度の方針と予想
	本年度は、学童期の日常生活や行動範囲などを想定し、理解しやすい塩分摂取意識調査の準備を進める。まずは、面接調査を行うためのインタビューガイドの作成と調査フィールドの確保を行う。
	(1)研究・開発等のテーマ名
	発達障害児をもつ養育者支援における保健師-保育士の連携促進プログラムの開発
17	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	本研究ではすでに実施した質的研究(インタビュー調査)の結果を参考に、両職種との連携に関する質問票を作成して保健師・保育士への質問紙調査を実施する。得られたデータから、発達上気になる子どもをもつ保護者への支援における保健師-保育士の連携活動の特徴および連携活動の関連要因、相互役割期待を明らかにする。

18	(1)研究・開発等のテーマ名	変形性斜頭症・絶壁頭の予防マットの研究開発
	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	乳幼児の斜頭症や絶壁頭など頭部の変形は、向き癖や長時間の仰向け寝の影響があるといわれている。頭部の変形は噛み合わせや歯並びに問題が出る、左右の姿勢のバランスを崩し歩行に影響を及ぼすなどの身体的影響への不安から、斜頭症や絶壁頭の防止用具のニーズは高い。従来の防止用具が就寝時の向きを矯正しているのに対し、本研究は乳児への負荷を与えることなく、斜頭症や絶壁頭を予防することに主眼を置いた寝具を開発し、その効果と安全性を検証することを目的としている。乳幼児の頭は柔らかく外圧で変形しやすいため体圧分散を図り、頭に掛かる圧力を低減すれば変形しにくいとの仮説から、従来品に比べ頭や身体に掛かる負荷が少なく、且つ、安全なマット(以下、開発品とする)を開発してきた。しかし、斜頭症や絶壁頭の予防効果につながるかの確認ができていないため、開発品と従来品を使用したそれぞれの児頭の形状を縦断的に観察・検討する。
	(3)前年度までの状況	本研究は企業との共同研究により、平成23年12月27日浜松医科大学医の倫理委員会で承認を得(第23-127号)、乳幼児モデルで開発を進め児頭への負荷の少ない開発品を作成した。平成24年12月から浜松医科大学医学部附属病院での新生児での第1次調査において開発品と従来品との体圧分散性能とストレス値の比較および安全性を検証した。第2次調査(E14-085)で開発品と従来品を使用した斜頭症や絶壁頭の発症状況を観察し、開発品の予防効果を縦断的に検証するため、平成26年10月～平成27年度にかけて、生後10日以内、1か月後、3か月後、6か月後の児頭の形状の変化を調査してきた。調査方法は家庭訪問による児頭の写真撮影と計測、および質問紙による向き癖や睡眠時間の把握であった。質問紙の結果から、「生後3か月までの頭部の変形とその要因」を向き癖・抱かれている時間・睡眠時間で検討し学会発表した(第30回日本助産学会-京都-ポスター発表)。しかし、球体の頭部を写真で判定するには限界があり、斜頭症・絶壁頭の有無を画像で示すことが困難であった。そこで、調査の方法の見直しが必要になった。また、この調査結果から対象の条件・調査時期についても見直すことになった。
	(4)当該年度内の進捗	調査対象の条件・調査時期・頭部の撮影方法を見直した。調査対象の条件では、これまで対象外にしていた帝王切開で出生した児や産瘤のある児を対象内とした。調査時期は大泉門が閉鎖するまで追って観察するとし、生後1か月・3か月後・6か月後・12ヶ月後・18か月後の5回とした。撮影方法は安全で球体の形状を画像で示す方法として、写真の連写を行うこととした。これらの見直しを迅速審査に申請し、平成31年7月までの延長が承認(E14-085-2)された。学会発表:「体圧分散の違いによるマットでの乳児の向き癖や児頭の変形予防への比較検討」(第57回母性衛生学会-東京-ポスター発表)
	(5)翌年度の方針と予想	承認番号E14-085-2に基づいて研究協力者を募り、児頭の撮影と計測、質問紙による調査を行う。
19	(1)研究・開発等のテーマ名	母親が期待する子育て支援とそれに関する要因 —子育て支援の外的要因と母親の気質と養育者としての発達との関連—
	(2)研究・開発等の背景、目的、内容の概略	本研究は、育児中の母親が外的要因のひとつである子育て支援に期待しているのか、それぞれのサービス形態や支援の内容による期待を抽出し、内的要因である気質や養育者としての発達との関連を把握することである。これにより、内的要因をふまえ、個別性のあるよりきめ細やかな支援の提供が可能となる。
	(3)前年度までの状況	H26年度は期待する子育て支援の形態や相談内容、気質等を1か月・6か月・1歳6か月児を養育中の1500名の母親に調査を行い、データ分析の一部を2つの学会にて発表した。H27年度は母親が期待する子育て支援と気質との関連について分析を実施した。
	(4)当該年度内の進捗	H28年度は、前年度の分析結果をもとに論文としてまとめ投稿中である。これより、母親が子育て支援に期待する内容と気質との関連は、属性との比較のみでは示されなかった因子との関連が示された。これより、気質に応じた支援を提供することが有益であることが示された。
	(5)翌年度の方針と予想	H29年度は、前年度の分析結果をもとにさらに別の視点からも分析をすすめ新たな知見を探索する。

20	(1) 研究・開発等のテーマ名	母親の清潔なおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメント予防に関する新機軸研究
	(2) 研究・開発等の背景、目的、内容の概略	「おしゃれ」は自分らしさ表現する方法のひとつであり、所属集団に受容されるために不可欠で義務的なものでもある。子育てをしている母親は子どもの世話や家事などを行いつつ、女性としての毎日の生活を過ごしている。女性の高学歴化、就業率の増加傾向がみられるが、働きながら子育てをしている女性にやさしい環境とは言い難い。そのような中で、母親のおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメントとの関連を調査し、これからのよりよい子育て環境づくりの一助とする。
	(3) 前年度までの状況	静岡県A市において1歳6か月児を養育している母親を対象に、化粧や服装に関するおしゃれ意識と行動、子どもの育てにくさや子育てのやりがいなどについて質問票調査を実施した。その後子どもが3歳になった時に縦断調査を行っている。
	(4) 当該年度内の進捗	静岡県のA市の3歳の子ども母親についての縦断調査が終了する。今後は得られたデータを分析し、学会発表等を行っていく。
	(5) 翌年度の方針と予想	得られた知見を母親の生活や社会の中で活用できるように働きかけていく。
21	(1) 研究・開発等のテーマ名	子宮頸部異形成患者の看護実践モデルの構築にむけて
	(2) 研究・開発等の背景、目的、内容の概略	子宮頸がん検診で要精査と告げられた女性の心理的変化を調査し、必要とされている看護を明らかにすることを目的としている。
	(3) 前年度までの状況	外来看護に関わる看護師への質問紙調査を実施し課題を明らかにした。
	(4) 当該年度内の進捗	子宮頸がん健診で要精査と告げられた女性への面接調査を実施した。
	(5) 翌年度の方針と予想	今後は得られたデータを分析予定である。

### 3 論文、症例報告、著書等

	平成28年度
(1) 原著論文数(うち和文のもの)	14編 ( 12編 )
そのインパクトファクターの合計	2.710
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	12編
そのインパクトファクターの合計	0.000
(3) 総説数(うち和文のもの)	9編 ( 8編 )
そのインパクトファクターの合計	0.000
(4) 著書数(うち和文のもの)	11編 ( 10編 )
(5) 症例報告数(うち和文のもの)	0編 ( 0編 )
そのインパクトファクターの合計	0.000

**(1) 原著論文****A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの**

	筆頭著者, 共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁-終頁, 掲載年.	IF
1.	鈴木みずえ, 木本明恵, 中島怜子, 長谷川拓也, 中込敏寛: タクティールケアの心理・生理機能に及ぼす効果 心理尺度・脳波・心拍変動を用いた評価, 日本早期認知症学会誌, 9(1), 32-40, 2016.	0.000
2.	千々岩友子, 石村佳代子: 在宅療養中の統合失調症者が支援者と関係を構築していくプロセス, 日本外来精神 医療学会誌, 16(2), 61-67, 2016.	0.000
3.	武田江里子, 小林康江, 弓削美鈴: 乳幼児を子育て中の母親から子どもへの「愛着-養育バランス」に影響する 内的要因—母親の被養育体験と内的作業モデルの影響—, 日本看護科学会誌, 36, 71-79, 2016.	0.000
4.	武田江里子, 弓削美鈴, 小林康江: 母親が子育てをしやすく感じられるリーフレットの試作—母親の産後1か月 時の気持ちに着目して—, 日本母性看護学会誌, 17(1), 81-88, 2017.	0.000
5.	宮城島恭子, 大見サキエ, 高橋由美子: 小児がんをもつ子どもの学校生活の調整に関する意思決定プロセスと決 定後の気持ち—活動調整と情報伝達に焦点を当てて—, 日本小児看護学会誌, 26, 51-58, 2017.	0.000
6.	安田孝子, 尾島俊之, 中村美詠子: 月経周期と生活行動要員・精神的要因との関連, 静母衛誌, 5, 11-14, 2016.	0.000

論文数(A)小計 6 うち和文 6 IF小計 0.000**B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの(学内の共同研究)**

	筆頭著者, 共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁-終頁, 掲載年.	IF
1.	渡邊美樹, 鈴木みずえ, 長田久雄: 地域サロンに参加する女性高齢者の口腔の健康への認識と外出頻度との 関連, 日本公衆衛生看護学会誌, 5(2), 116-125, 2016.	0.000
2.	古田良江, 鈴木みずえ: 地域高齢者の転倒・疼痛と健康関連QOLとの関連 横断研究, 日本転倒予防学会誌, 2 (3), 41-48, 2016.	0.000

論文数(B)小計 2 うち和文 2 IF小計 0.000**C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの**

	筆頭著者, 共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁-終頁, 掲載年.	IF
1.	Kasai S, Nishizawa D, Hasegawa J, Sato N, Tanioka F, Sugimura H, Ikeda K: Nociceptin/orphanin FQ receptor gene variation is associated with smoking status in Japanese: Pharmacogenomics, 17, 1441-51, 2016.	2.710
2.	Sato T, Sato N: Clinical relevance of the hip joint: Part II-Importance of joint distraction: International Musculoskeletal Medicine, 38, 11-16, 2016.	0.000
3.	鈴木智子, 鈴木みずえ, 宮崎良子, 石田美里, 齋藤洋介, 内山幸: 緊急入院した高齢患者に対するせん妄予防 を目的とした看護を振り返る タクティールケアとリアリティ・オリエンテーションを用いた実践. 認知症ケア事例 ジャーナル, 9(1), 30-39, 2016.	0.000
4.	速水恵美, 千々岩友子: 学齢期の発達障害児をもつ母親の推論の誤りと抑うつおよび養育態度の関連, 日本看 護科学会誌, 2017. (印刷中)	0.000
5.	千葉豊子, 武田江里子, 久保田君枝: 産婦の実母が出産に立会うことの意味—立会い出産に関する出産前後 の産婦・夫・実母の考えから—, 母性衛生, 57(2), 430-437, 2016.	0.000
6.	大見サキエ, 宮城島恭子, 坪見利香: 脳腫瘍患児2事例の復学支援—退院時調整会議の有効性の検討—, 岐 阜聖徳学園大学研究誌, 2, 1-12, 2017.	0.000

論文数(C)小計 6 うち和文 4 IF小計 2.710**(2-1) 論文形式のプロシーディングズ****A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの**

	筆頭著者, 共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁-終頁, 掲載年.	IF
1.	鈴木みずえ: 認知症高齢者の転倒予防. 臨床神経学, 55, S25, 2015.	0.000
2.	鈴木みずえ: 看護専門領域におけるアセスメントと看護診断 認知症高齢者に対するアセスメントと看護診断. 看 護診断, 20(2), 54-56, 2015.	0.000
3.	武田江里子, 木村幸恵, 田坂満恵: 在日外国人である母親の「愛着-養育バランス」の特徴—4か国での比較 —, 日本助産学会誌, 30(3), 486, 2017.	0.000
4.	坪見利香, 中野さちこ: 発達障害児への看護実践に関する研修プログラムに必要な内容—保護者が必要とする 看護支援と看護師の学習ニーズから—, 小児保健研究, 75巻, 187, 2016年5月	0.000
5.	Tsubomi Rika: Development of Training Program Subjecting Outpatient Nurses Related to Developmental Disabilities -Implementation and Evaluation for The Second Edition- The 8th Asian Society of Child Care, 1- 4, 2016.	0.000
6.	坪見利香, 中野さちこ: 外来看護師が求めている発達障害児への看護実践に関する研修内容, 第26回日本 小児看護学会学術集会, 2016.	0.000

論文形式のプロシーディングズ数(A)小計 6 IF小計 0.000**B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの(学内の共同研究)**論文形式のプロシーディングズ数(B)小計 0 IF小計 0.000



C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

筆頭著者、共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁-終頁, 掲載年.		IF
1.	藤原美由紀, 三枝智宏, 鈴木みずえ: 入院高齢患者の認知症の行動・心理症状の心身ケア依存度への影響. 地域医療, 第55回特集号, 594-597, 2016.	0.000
2.	征矢野あや子, 鈴木みずえ, 原田敦, 岡田真平, 上内哲男: 転倒・転落リスクのアセスメントツールに関する調査の概要報告. 日本転倒予防学会誌, 3(2), 68, 2016.	0.000
3.	村田康子, 中村裕子, 鈴木みずえ, 田邊薫, 渡辺恵美子, 関口清貴, 吉村浩美, 佐久間尚実, 桑野康一, 水野裕: パーソン・センタード・ケア視聴覚教材“共に歩む”の開発と試行結果(第1報) 試行研修のアンケート結果を通して. 日本認知症ケア学会誌, 15(1), 307, 2016.	0.000
4.	木本明恵, 鈴木みずえ, 千葉京子, 石倉真由, 工藤千秋: タクティールケアが認知症高齢者における心理面の有効性に関する研究 TDMS(二次元気分尺度)を用いた検討. 日本認知症ケア学会誌, 15(1), 246, 2016.	0.000
5.	大見サキエ, 宮城島恭子, 坪見利香: 脳腫瘍患児2事例の復学支援 -退院時調整会議の有効性の検討-, 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌, 第2巻, 1-12, 2017年	0.000

論文形式のプロシーディングズ数(C)小計 5 IF小計 0.000

(2-2)レター

筆頭著者、共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁-終頁, 掲載年.		IF
1.	千々岩友子: 誰にでもわかる見えるデイケアを目指して, psychiatry day care research in fukuoka, 34, 41-44, 2016.	0.000

レター数小計 1 IF小計 0.000

(3)総説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

総説数(A)小計 0 うち和文 0 IF小計 0.000

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの(学内の共同研究)

筆頭著者、共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁-終頁, 掲載年.		IF
1.	鈴木みずえ. 認知症高齢者の転倒予防 認知症高齢者の視点からの転倒予防のエビデンスと実践. 日本転倒予防学会誌, 2(3):3-9, 2016.	0.000
2.	鈴木みずえ: 認知症を正しく理解するために知っておきたいこと. Oncology Nurse, 10(3), 88-93, 2017.	0.000
3.	鈴木みずえ: 転倒の要因から考える環境の工夫. 認知症ケア最前線, 60, 39-43, 2016.	0.000
4.	鈴木みずえ, 金森雅夫: 認知症高齢者の転倒予防. 日本認知症ケア学会誌, 15(3), 577-584, 2016.	0.000
5.	鈴木みずえ: 神経疾患患者の転倒を予防するために チームで取り組む転倒予防 認知症高齢者の転倒予防看護の立場から 認知症高齢者の視点から考える転倒予防. 神経治療学, 33(2), 250-254, 2016.	0.000
6.	鈴木みずえ, 吉村浩美, 金森雅夫, 長田久雄: パーソン・センタード・ケアをめざした急性期病院における認知症看護研修プログラムの検討 視聴覚教材(DVD)を用いたリフレクションの効果. 日本早期認知症学会誌, 9(3), 95, 2016.	0.000
7.	鈴木みずえ, 篠崎恵美子, 吉村浩美: 看護教育における認知症模擬患者(Simulated Patient: SP)を用いたシミュレーション学習の効果 看護学生の訪問看護に関する演習を通して. 日本認知症ケア学会誌, 15(1), 322, 2016.	0.000
8.	鈴木みずえ: パーソン・センタード・ケアの視点に立ったケアの実践. 認知症ケア最前線, 56, 46-51, 2016.	0.000

総説数(B)小計 8 うち和文 8 IF小計 0.000

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

筆頭著者、共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁-終頁, 掲載年.		IF
1.	Sato T, Sato N, Sato K: Review of the iliocapsularis muscle and its clinical relevance: Anat Physiol 6:237. doi: 10.4172/2161-0940.1000237, 2016.	0.000

総説数(C)小計 1 うち和文 0 IF小計 0.000

(4)著書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

著者: タイトル, 出版社名, 巻, 初頁-終頁(頁数), 発行年.		IF
1.	Sato N, Sato T, Sugimura H: Genetic aspects of smoking behavior in the Japanese population. In: Preedy VR, ed. Neuropathology of drug addictions and substance misuse Vol 2. Elsevier; 1046-1054(9), 2016.	
2.	菅野久美, 末田朋美, 近藤真紀子: 第5章乳腺および女性生殖系の疾患, 看護学生のための疾患別看護過程2 第2版, メヂカルフレンド社, 325-347(23頁), 2017	
3.	鈴木みずえ: 看護実践能力習熟段階に沿った 急性期病院でのステップアップ認知症看護, 日本看護協会出版会, (212), 2016.	
4.	鈴木みずえ(編集): 多職種チームで取り組む認知症ケアの手引き, 日本看護協会出版会, 2-21, 54-60(145), 2017.	

5.	鈴木みずえ:タクティールケアで地域・在宅のナースができること、木本明恵(編):はじめてのタクティールケア、日本看護協会出版会、14-20(7)、2016.	
6.	鈴木みずえ、看護師、保健師、日本転倒予防学会(監修)、武藤芳照(著)、鈴木みずえ(著)、饗場郁子(著):多職種で取り組む転倒予防チームはこう作る!、新興医学出版社、36-40(5)、41-44(4)、2016.	
7.	鈴木みずえ、高齢者施設、日本転倒予防学会(監修)、武藤芳照(編集)、鈴木みずえ(編集)、原田敦(編集):転倒予防白書2016、日本医事新報社、62-70(9)、2016.	
8.	鈴木みずえ、認知症高齢者の転倒予防、日本看護協会(編):認知症ケアガイドブック、155-160(5)、照林社、2016	
9.	大見サキエ、森口清美、谷口恵美子、河合洋子、畑中めぐみ、高橋由美子、谷脇歩実、宮城島恭子、平賀健太郎、安田和夫、堀部健三:おかえり! めいちゃん 白血病とたたかった子どもが学校にもどるまで(改訂版)、ふくろう出版、2016	

著書数(A)小計 9 うち和文 8

**B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの(学内の共同研究)**

	著者: タイトル, 出版社名, 巻, 初頁-終頁(頁数), 発行年.	IF
1.	遠藤俊子監修, 分担 武田江里子: 助産師基礎教育テキスト・分娩損傷, 日本看護協会出版会, 第7巻(2017年版), 245-248, 2017.	

著書数(B)小計 1 うち和文 1

**C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの**

	著者: タイトル, 出版社名, 巻, 初頁-終頁(頁数), 発行年.	IF
1.	秋元典子, 坂出由美子, 菅野久美, 末田朋美, 近藤真紀子: 第5章 乳腺および女性生殖系の疾患, 看護学生のための疾患別看護過程2 第2版, メヂカルフレンド社, 322-324(3頁), 2017	

著書数(C)小計 1 うち和文 1

**4-1 特許等の知的財産権の取得状況**

	平成28年度
特許等取得数(出願中含む)	0 件

**4-2 薬剤、医療機器等の実用化、認証、承認、製品化、販売等の状況**

	平成28年度
実用化、認証、承認、製品化、販売数	0 件

**5 医学研究費取得状況**

	平成28年度	
	件数	金額 (万円未満四捨五入)
(1) 科学研究費助成事業(文部科学省、日本学術振興会)	20 件	1,363 万円
(2) 厚生労働科学研究費	0 件	0 万円
(3) 日本医療研究開発機構(AMED)による研究助成	0 件	0 万円
(4) 科学技術振興機構(JST)による研究助成	0 件	0 万円
(5) 他政府機関による研究助成	1 件	60 万円
(6) 財団助成金	0 件	0 万円
(7) 受託研究または共同研究	1 件	20 万円
(8) 奨学寄附金	0 件	0 万円

**(1) 科学研究費助成事業(文部科学省、日本学術振興会)**

1.	森恵子(代表), 基盤研究(C), 集学的治療を受ける食道がん患者の「回復の実感」獲得を促進する看護実践モデルの構築, 平成26年度～平成29年度	60万円
2.	佐藤直美(代表), 基盤研究(C), 慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度を測定する国際的尺度の開発, 平成26年度～平成29年度	9万円
3.	菅野久美(代表), 森恵子(分担), 基盤研究(C), 外来化学療法を受けるがん患者の心身緊張緩和を促進する看護実践指針の検証, 平成28年度～平成30年度	220万円
4.	杉山琴美(代表), 若手研究(B), 多胎妊娠を告げられた女性の看護実践モデルの構築, 平成23年度～平成28年度	60万円
5.	森恵子(分担), 挑戦的萌芽研究, 手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムの構築, 平成27年度～平成29年度,(研究代表者)聖隷クリストファー大学看護学部助教 氏原恵子	10万円
6.	佐藤裕紀(代表), 若手研究(B), 心大血管術後急性期リハビリテーションにおける離床遅延要因の検討, 平成27年度～平成30年度	30万円
7.	牧野公美子(代表者), 白柳聡美(分担), 基盤研究(C), 終末期認知症高齢者の代理決定における家族と看護師の対立と一致	140万円
8.	鈴木みずえ(代表), 基盤研究(B), 認知症高齢者の転倒予防看護質指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発, 平成26年度～平成29年度	225万円
9.	鈴木みずえ(代表), 挑戦的萌芽研究, 急性期認知症看護モデルを用いた戦略的ベンチマーキングの開発とケアネットワーク構築, 平成27年度～平成29年度	65万円
10.	鈴木みずえ(分担), 基盤研究B, アジアの認知症高齢者の徘徊などの心理行動学的徴候と関連要因の国際疫学調査, 平成26年度～平成28年度,(研究代表者)大阪大学医学系研究科教授 牧野清子	35万円
11.	鈴木みずえ(分担), 基盤研究B, 長期療養施設における慢性痛ケアの質向上のための教育プログラム開発, 平成25年度～平成28年度,(研究代表者)東京大学医学系研究科教授 山本則子	30万円
12.	白柳聡美(分担), 基盤研究(C), 認知症高齢者の尊厳と治療を支える急性期病院型看護モデル開発の協働実践型研究, 平成27年度～平成29年度,(研究代表者)倉田貞美	4万円
13.	千々岩友子(代表), 若手研究(B), 精神科デイケア導入期における看護支援を包含した早期リハビリテーションの評価, 平成26年度～平成29年度	50万円
14.	増田郁美(代表), 若手研究(B), 在日外国人の精神的健康とストレス対処行動に関する研究, 平成28年度～平成30年度	15万円
15.	木村幸恵(分担), 母親の養育者としての発達を促す支援—育児不安に対するSAT法による予防的介入—, 平成26年度～平成29年度,(研究代表者)小児看護学講座教授 武田江里子	110万円
16.	坪見利香(分担), 成人移行期の小児がん経験者の健康管理と生活調整の自立のプロセスを支える看護援助, 平成28年度～平成31年度,(研究代表者)臨床看護学講師 宮城島恭子	115万円
17.	坪見利香(分担), 小児期の食育に関わる減塩教育プログラムの開発, 平成28年度～平成30年度,(研究代表者)常葉大学 加藤千明	6万円
18.	坪見利香(分担), 達障害児をもつ養育者支援における保健師—保育士の連携促進プログラムの開発, 平成28年度～平成33年度,(研究代表者)地域看護学准教授 大塚敏子	0万円
19.	安田孝子(代表), 挑戦的萌芽研究, 将来の糖尿病発症者である妊娠糖尿病妊婦を未病にするケア開発と医療費削減の効果, 平成27年度～平成29年度	169万円
20.	足立智美(代表), 若手研究(B), 子宮頸部異形成患者の看護実践モデルの構築にむけて, 平成24年度～平成27年度	10万円

**(5) 他政府機関による研究助成**

1.	鈴木みずえ, 国立研究開発法人国立長寿医療研究センター理事長, 認知症「生活支障(トラブル)」の発症機序と対応に関する研究, 平成28年度	60万円
----	---	------

**(7) 受託研究または共同研究**

1.	ソフトブレイン工業株式会社	20万円
----	---------------	------

**6 大型プロジェクトの代表, 総括**

**7 学会活動**

	(1) 国際学会	(2) 国内学会
1) 基調講演・招待講演回数	0 件	2 件
2) シンポジウム発表数	1 件	2 件
3) 学会座長回数	0 件	3 件
4) 学会開催回数	0 件	0 件
5) 学会役員等回数	0 件	1 件
6) 一般演題発表数	5 件	

(1)国際学会等開催・参加

2)国際学会・会議等でのシンポジウム発表

- Miyagishima K.:Perceptions and actions regarding medical treatment and health care among children with cancer -A focus on participation in decision making-, 16th Kyungpook-Hamamatsu Joint Medical Symposium, Hamamatsu, 2016.

6)一般発表

6-1)口頭発表

- Tsubomi Rika, Development of Training Program Subjecting Outpatient Nurses Related to Developmental Disabilities - Implementation and Evaluation for The Second Edition- , The 8th Asian Society of Child Care, 2016.9, Sapporo(Japan).
- Kimura Yukie, Takeda Eriko, Tasaka Mitsue: Internal factors related to supporting mother-child needs of non-Japanese mothers living in Japan, Kyungpook-Hamamatsu joint medical symposium Hamamatsu meeting, 2016/12, Japan.

6-2)ポスター発表

- Tomoko Chijiwa, Noriko Nishi, Hiroko Tanaka: Review on relaxation nursing interventions effect for persons with mental disorders in japan, Global Human Caring Conference, October,2016,China.
- Takeda Eriko, Kimura Yukie, Tasaka Mitsue : SUPPORTING MOTHER-CHILD NEEDS OF NON-JAPANESE MOTHERS LIVING IN JAPAN : FOCUSING ON THE MOTHER'S TEMPERAMENT AND NATIONALITY、18th International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology Congress, May 2016, Spain.
- Takako YASUDA, Toshiyuki OJIMA, Mieko NAKAMURA, Yosuke SHIBATA, Relationship between maternal depressed mood and mothers' feelings for their children using Attachment-Caregiving Balance Scale among Japanese women who raise their 18-month-old children, 18th Conference of the International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology, 2016.5.12-14, Malaga (Spain).

(2)国内学会の開催・参加

1)学会における特別講演・招待講演

- 鈴木みずえ、特別講演 認知症の人々への看護：一やさしさを伝えるケア、第31回(平成28年度)沖縄県看護研究学会 平成29年2月18日(土)沖縄県看護研修センター
- 第22回 鈴木みずえ日本老年看護学会 研究論文賞受賞講演:認知症高齢者における疼痛の有症率と疼痛が認知症の行動・心理症状(BPSD)に及ぼす影響 場所:大宮ソニックホール 開催日:平成28年7月23日(土)10:00~11:00

2)シンポジウム発表

- 鈴木みずえ、シンポジウム:認知症高齢者と家族の尊厳を支える看護とは、第47回日本看護学会慢性期看護学術集会、平成28年11月10日米子コンベンションセンター
- 武田江里子:助産実践に求められる尺度とその開発、第31回日本助産学会学術集会、徳島、2017年3月。

3)座長をした学会名

- 鈴木みずえ、日本認知症ケア学会東海大会 新オレンジプランの7本柱の地域実践と課題、アクトシティ浜松、平成28年12月4日
- 鈴木みずえ、日本認知症ケア学会大会、日時:平成28年年6月4日(土) 場所:神戸国際展示場
- 鈴木みずえ、日本転倒予防学会 場所:ウインク愛知、平成28年12月4日

5)役職についている国内学会名とその役割

- 菅野久美:日本がん看護学会 会則・渉外委員
- 森恵子:JAPAN JOURNAL OF NURSING SCIENCE 編集委員
- 鈴木みずえ 日本看護研究学会 査読委員・東海地方世話人
- 鈴木みずえ 日本老年看護学会 理事 編集委員会委員長
- 鈴木みずえ 第21回日本老年看護学会学術集会企画委員
- 鈴木みずえ 日本認知症ケア学会 評議委員・査読委員・東海部会委員
- 鈴木みずえ 第17回日本認知症ケア学会企画委員
- 鈴木みずえ 日本看護科学学会 社員・編集委員
- 鈴木みずえ 日本転倒予防学会 副理事長 転倒・転落アセスメントツール検討委員会 編集委員会顧問
- 鈴木みずえ 日本早期認知症学会 理事 学会誌編集委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	(1)外国	(2)国内
学術雑誌編集数(レフリー数は除く)	0件	1件

(3)国内外の英文雑誌のレフリー

- 鈴木みずえ:1回 American Journal of Alzheimer's Disease and Other Dementias(米国)
- 鈴木みずえ:2回 Geriatrics and Gerontology International(日本)
- 鈴木みずえ:1回 Japanese Journal of Nursing Science(日本)

## 9 共同研究の実施状況

	平成28年度
(1)国際共同研究	0 件
(2)国内共同研究	7 件
(3)学内共同研究	3 件

### (2)国内共同研究

1. 佐藤直美, 相村春彦(腫瘍病理学), 谷岡書彦(磐田市立総合病院検査科), 池田和隆, 西澤大輔(東京都医学総合研究所) 喫煙行動と遺伝子多型の関連
2. 牧野公美子, 白柳聡美, 杉澤秀博(桜美林大学): 認知症高齢者の終末期医療を代理決定する家族への看護支援  
鈴木みずえ, 泉キヨ子(帝京科学大学), 谷口好美, 加藤真由美(金沢大学), 平松知子(金沢医科大学), 丸岡直子, 寺井梨恵子(石川県立大学), 島田裕之(長寿医療研究センター), 六角僚子, 小林小百合, 関由香里(東京工科大学): 認知症高齢者の転倒予防質評価指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発 鈴木みずえ(代表), 基盤研究(B), 認知症高齢者の転倒予防看護質指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発, 平成26年度~平成29年度
3. 鈴木みずえ, 吉村浩美(聖隷三方原病院): 急性期病院における認知症看護モデルの開発 鈴木みずえ(代表), 挑戦的萌芽研究, 急性期認知症看護モデルを用いた戦略的ベンチマーキングの開発とケアネットワーク構築, 平成27年度~平成29年度  
鈴木みずえ, 服部英幸(長寿医療センター): 介護施設, 一般病院における認知症BPSD初期対応の効果検証に関する研究 鈴木みずえ, 国立研究開発法人国立長寿医療研究センター理事長, 認知症「生活支障(トラブル)」の発症機序と対応に関する研究, 平成28年度
4. 宮城島恭子, 市江和子, 坂口公祥: 成人移行期の小児がん経験者の健康管理と生活調整の自立のプロセスを支える看護援助, 科学研究費助成事業 基盤研究(C), 平成28年~31年
5. 大見サキエ, 森口清美, 谷口恵美子, 高橋由美子, 谷脇歩実, 河合洋子, 平賀健太郎, 宮城島恭子, 畑中めぐみ, 安田和夫, 堀部敬三: がんの子どもの復学支援構築支援のための復学支援プログラムの開発, 科学研究費助成事業 基盤研究(B), 平成27年~31年

### (3)学内共同研究

1. 河島光代・森恵子: 直腸がんサバイバーの手術後補助化学療法と就労継続を可能にする看護支援モデルの構築
2. 森恵子・杉山琴美・河島光代: 看護系大学の看護実習において、術後せん妄を発症した患者との関わりをもった学生の体験
3. 森恵子・杉山琴美・河島光代: 急性期看護学実習における看護学生の手術台上での臥床体験

## 10 産学共同研究

	平成28年度
産学共同研究	1 件

## 11 受賞

### (3)国内での受賞

1. 平成28年度早期認知症学会論文賞 鈴木みずえ「タクティールケアの心理・生理機能に及ぼす効果 心理尺度・脳波・心拍変動を用いた評価」(日本早期認知症学会誌9(1)、32-40、2016)平成28年9月17日熊本市鶴屋ホール

## 12 新聞, 雑誌, インターネット等による報道

1. 鈴木みずえ, 転倒事故予防に地域住民の力 浜松の業者が支援者養成講座, 中日新聞, 2016年10月10日(第26577号)
2. 鈴木みずえ, 季刊「NHK ガッテン」タッチケアで認知症高齢者の攻撃性が緩和p.27, 2017年3月16日(Vol.34)
3. 鈴木みずえ, シリーズ 認知症のケアの今② パーソン・センタード・ケアを考える認知症模擬患者とのシミュレーション研修、看護 2016年10月号(Vol.68, No.12)
4. 外国人に風邪対処法, 中日新聞(県内版), 2016年10月9日

## 13 その他の業績

1. 平成28年4月から急性期病院の認知症ケア加算が新設された。平成28年度より医学映像教育センターと共同で、視聴覚教材を開発した。これらは認知症ケア加算対応研修など病院の看護師用の研修、大学教育で活用されている。鈴木みずえ原案監修: DVD「認知症高齢者の看護 パーソン・センタード・ケアの視点」、全5巻、医学映像教育センター、2015~2017.
2. 平成27年度に行った在日外国人(乳幼児を子育て中の母親)を対象に行った調査の報告書を作成し、関連機関に配布した。